

ブライズ先生のシェイクスピア断章——「禅」の問題

Doctor Blyth's ZEN Reading of Shakespeare

齋藤 衛

SAITO Mamoru Ph.D.

Abstract: Dr. Blyth, author of his classic four volume *Haiku* (1949) proposes to read Shakespeare in terms of Zen. To be more specific, in the last chapter “Shakespeare” of his monumental *Zen in English Literature* (1941), refuting strongly Santayana’s view of Shakespeare as a completely non-religious poet, he writes that Shakespeare had his own kind of religion, namely, Zen.

This may seem a rather unusual way of understanding Shakespeare, but if it is accepted that Satori or enlightenment of Zen is to be “steady and immediate” (quoting from one of Wordsworth’s poems, Dr. Blyth says it is “the hallmark of Zen”): to be immersed, in the selfless state of mind, here and now, in whatever you are doing, then you will begin to think there may be something in his view.

For, as Shakespeare himself writes in Sonnet 111, that his “nature is subdued / To what it works in, like the dyer’s hand”, he becomes Hamlet, Othello, Lear and Macbeth, with nothing between him and the “vessel he is poured into”. For us there is no preaching, no morality, no formal religion encumbering our identification with his creations.

My tentative conclusion is that Basho, who, is the supreme Zen poet of Nature (plants, animals and natural phenomena) for Dr. Blyth, and pervades the whole book, inspires him to find the same sort of directness, or oneness, with Nature (the human world at large) in Shakespeare. Most certainly he helps us to rediscover Shakespeare the poet, almost totally forgotten in our age of politicizing and historicizing Shakespeare. (July4)

Keywords: R.H. Blyth, Zen, Shakespeare, Munakata Kuniyoshi

ブライズ、禅、シェイクスピア、宗片邦義

畏友宗片さんは、ブライズ先生を敬愛すること深く、東京教育大の学部、院、そして、それが終わってからも「追っかけ」を続け、都合 9 年間、師事されたという。おそらく一番の愛弟子だろう。その間、先生に鍛えられた、最後の頃の一対一での英詩の朗読法が、彼の創始した英語シェイクスピア能の基をつくり、やがて、独力で完成、日本から始めて欧米各地で上演、広く認められるに至った（上田邦義『ブライズ先生、ありがとう』三五館 2010）。

時期は少しずれ机を並べたことはないが、同じ大学の学部で二年、院で4年、先生の教えを受けた者として証言するのだが、先生のあの講義によく粘り強くついていき、そして、遂に自分のものにしたものだと、驚き、敬服するほかはない。

というのは、先生の講義は、古今東西の、『碧眼録』から聖書、大拙に至る宗教書、芭蕉を中心とする日本の和歌、俳句、西欧は『神曲』、『ドン・キホーテ』、『ファウスト』等々を自在に飛び回りながら、英文学をテキストにした禅的人生講話といったもので、普通の英文学講義を期待していたら目を回してしまうような、天衣無縫で型破りのものだったからだ。もうひとつ、われわれが先生に教わった50年代末から60年代にかけて、英文学会、評壇を支配したのは、文学作品では、エリオット『荒地』とジョイス『ユリシーズ』（ともに1922）批評では新批評、もしくは分析批評、つまり、モダニズムの時代で（その後批評は時代の波を被って、政治化、歴史化の時代に突入する）、それらに完全に背を向けた、芭蕉、ワーズワス中心の先生の講義は、時代に即した研究方法をものにしなればと焦る青年にとって、深遠過ぎたからである。それやこれやで、心を残しながら先生から離れていった。それでも、先生の教えが、自分の中に深く食い込んでいるのを折に触れて感じないわけにはいかない。

そういうブライズ・クラス脱落者が、宗片さんの快著に触発されて、今度始めて、先生の『禅と英文学』1941（ビート詩人たちのバイブルであった『俳句』4巻を含めて、夥しいお著書の中で、大戦勃発前夜、金沢で完成されたマニフェスト的処女作のこれが、やはり主著であろう）に真剣に取り組むことになったのである。迂闊にも、その最終章が、自分の研究対象としてきた「シェイクスピア」で結ばれ、大著のクライマックスをなしていることさえ知らなかった。それはかえって幸運であったかもしれない。70年以上も前のものだが、一読して与えられた新鮮な驚きは、シェイクスピアについて改めて考えるきっかけとなったのである。以下は、現在、シェイクスピア研究に携わる者が、先生の「シェイクスピア」をどう受け止めたか、自分に問うものである。もとより首尾一貫、手際よくまとまったものなど望むべくもない。それができないのが、ブライズ先生で、優しく怖く、ユーモアがあって真剣、脱俗の人で実際家、剛健で平和主義者、云ってよければ、巨人的怪物だった。以下、アト・ランダムに思いついたままを書きつづる。

目白の閑静なお住まいの玄関を開けると、先生の弾かれるバツハが聞こえた。そしてお茶をいただきながら、おもむろに聴講者三名の静かな講義が始まるのだった。二人は大学の教師という月並みの道を進んだが、一人は、後、アメリカでキリスト教宣教師になったという話を聞いた。その後のことは知らない。

その時の講義中にされた挿話のいくつかは、記憶に新しい。当時世間を騒がせた事件で、デパートの屋上から若い女性が飛び降りを行い、下を通りかかった青年に激突、即死させ

るというのがあった。早稲田露文の出身で、新婚ほやほや、友人の友人だった関係で特別痛ましく感じたのだが、それに触れて、自殺とは他殺であると断言され、どきりとした。また、現天皇の皇太子時代、先生が長く家庭教師をされたのは広く知られているが、その経験からのお話に、「彼は本をあまり読まない、それには賢すぎる」というのがあった。万卷の書を読みながら先生は読書に懐疑的だというコンテキストにおいてだが。後日、ストア派の哲人ローマ皇帝マルクス・アウレリウスが、「本への憧れを捨てよ。そんなものは役に立たない」と書いているのを読んで、膝を打った、それが帝王学だ、と。もう一つ、ソウル（京城）の禅寺で座禅をされた時のこと、終わって山門を出た修行者が、坂にずらりと並ぶ物乞いを、右左に蹴飛ばしながら帰るのだ、と笑われた。禅に批判的な部分がおありで、先生の禅は、チャリティーを重んじる母上のキリスト教（独立教会）に深い根をもっている。

「シェイクスピアは禅だ」と、ズバリと断定される。スペインの哲学者サンタヤナの、シェイクスピアは、この世のあらゆる豊かさ、多様性を描いたが、その世界のありのままを、その背景も、従って、意味も（宗教も）ないまま投げ出した、という解釈を、シェイクスピアも宗教も知らぬ妄言だと切り捨てる。フォーマルな、制度としての宗教でなく、「禅」において、それはあった、と。それでは禅とはなにか。“steady and immediate”「じいっと、そして、じかに」見ること、それにつきる。この句自体、ワーズワスの詩からとられていることが示すように、先生にとって、若きワーズワスの詩がすなわち禅である。だから、シェイクスピア論の直前におかれ、先生が英国詩人中自分の分身のように、もっとも親身に愛されたワーズワスからシェイクスピアに入るのがいい（それだけに、思弁的になり汎神論に陥り、果ては国教会に飲み込まれた、晩年のワーズワスへの失望と落胆は激しく、“detestable”「おぞましい」と容赦がない。ちなみに、病める魂としてコールリッジが、そして、センチメンタルだとしてラフカディオ・ハーンが容赦のない酷評を受けている）。ワーズワスの、「ダフォディルス」、「イディオット・ボーイ」、「ウイー・アー・セヴン」などに典型的にみられる、詩人と自然（及び自然としての人間）との間に、観念がいつさえい介在しない、自然との直接的交わり、そこに先生が最高の禅詩人とする芭蕉の俳句に共通する禅がある。シェイクスピアは、そうした“steady and immediate”のまなざしで、人間世界を見た、と論じられる。

シェイクスピアが、卑しい人気稼業しか与えてくれなかった、わが運命の女神を嘆くソネット 111「染物屋の手」に彼の真骨頂を見る。「染物屋の手が、使う材料の色に染まってしまうように、僕の本心まで仕事の色と“subdued”同じになってしまうのだ」を引いて、彼が描く人間世界と詩人との間に何も介在せず——そして全く同時に、バッハの音楽とバ

ッハ自身の関係のように、一貫してシェイクスピアがそこにいる——、対象がそのまま詩となっているといい、それがシェイクスピアの「禪」であり、宗教だとされる。男、女、この現象世界をありのまま、そのまま、受け入れるということ。先生が、マクベス夫人の、

I have given suck, and know
How tender 'tis to love the babe that milks me:
I would, while it was smiling in my face,
Have pluck'd my nipple from his boneless gums,
And dash'd the brains out, had I so sworn as you
Have done to this.

から始めて、ハムレットとオセローからそれぞれ一行を引き、最後にリアの絶叫を、

No, no, no life!
Why should a dog, a horse, a rat, have life,
And thou no breath at all? Thou'lt come no more,
Never, never, never, never, never!

殆ど注釈もなく、詩行の出所まではぎ取って、生のシェイクスピアを一見無造作に読者の前に並べてみせるとき、我々はまるで抜き身の剣がぬつと目の前に突き出されたように、熟知しているはずの詩行に、今更のようにそうだった、これがシェイクスピアだったと、衝撃を受ける。

重要なことは、そういった精神状態に浸っているとき、宗教の教義も道徳的規範も命の流れの中に溶け去り、「愛したり憎んだり、恐れたり哀れんだり、あらゆる感情を経験するが、正義や功罪の観念などはない、つまり、シェイクスピアには、審判がない。審判は、後になって、法的、道徳的観念に立ち返る時にのみ、現れてくる見解に過ぎない」というブラッドレーに賛成して、善は善、悪は悪だが、両方共必要なのであり、これらを受け入れることが禪であり、シェイクスピアだという。「われわれがハムレットやオセローを見ている間、我々はハムレットに、オセローになりきり、その時、神や不死は無用の長物となる」。「シェイクスピアの全作品を通じて、我々は、無私の与える自由、あらゆる事物、人間を差別せず平等に見る目、天国も地獄も今ここにあるという認識を見出すのである」。

先に抜き身の剣の比喻を用いたが、別の比喻でいうと、先生は、天馬空に行くような自由さをもって、ひと筆で、シェイクスピア四悲劇を含む10作品を、わずか10ページのうちに、さっとひと掃き禪の目でスイープされる。しかし、他方、上演されるドラマの観点

からすると、シェイクスピア劇は、言うまでもなく、人物と人物が交渉しあいぶつかりあってそれぞれ一つの世界を作っていて、『シェイクスピアと悲劇』（1981）の著者で、もう一人のわが師、オックスフォードのジョン・ベイリーが、「アレハアレ、コレハコレ」と言ったように、作品にそれぞれのロジックとそれぞれの生理ともいうべきものがある。そして更に、一つ一つの台詞にコンテキスト、文脈がある。そのように観点を変えるとどうなるか、「重箱の隅をつつく」ことになるのだが。

『夏の夜の夢』において、二組の恋する男女がアテネの森の中で、相手を取違えて追いつ追われつ、はては乱闘となる狂おしいカーニヴァルを、「人間ってバカだなー！」と高みから見物し、驚き笑う妖精パックに対して、そうした男女の狂乱をシイシェース公爵が総括して言う、“Lovers and madmen . . . apprehend / More than cool reason ever comprehend” (5.1.4—6) 「恋人と狂人は、クールな理性が理解する以上のものを思いつく」を、先生は、「クレイジーな愚行にこそ、理性的なものを突き抜ける真理がある」と解し、それが、シェイクスピア自身を代弁する劇の結論であるとされる (“he gives the final word”)。しかし、文脈からすると、これは、最終的コメントというよりは、理性の代表者たることを自負する為政者が、上から目線で狂気の「真理」の愚かしさに驚き呆れる台詞のように思われる。でなければ、奥方ヒポリタが、「おかしな話ではあるが、それでも、全体としては、辻褄が合い、真実味があるようです”grows to something of great constancy” (26) と言って、彼の批判にやんわりと訂正を加えたりしないだろう（シェイクスピア喜劇では大方女性が正しい）。この喜劇においては、理性と狂気の関係（狂わしい詩人の「想像力」を含めて）は、一方的に是非を断定できず、いわば、宙ずりにされているのではないか。

『リア王』に関しては、作品の顕著な詩行を取り上げてはコメントを加えるといった本章の基本的な方法の中で、例外的にリアの精神の軌跡が追及されている。この劇が、先生にとって、特別、愛着があり、重要だからであろう（ハムレット、オセローについては、人物論をされ、ハムレットは、言葉だけで、思考が空転し行動に出られない “Zen-less” 「禅なき」男、オセローについては、彼のデズデモーナへの「愛」は、自分への執着に過ぎず、そのため精神が淀み、アンパスに陥る悲惨な男である、と厳しい）。コーデリアが姉たちを批判する言葉、「それがいないために私は父上の愛情を失ってしまいましたが、それがいないことが、かえって私が豊かにする」 “still· soliciting eye” (1.1.231) 「いつも物欲しげな目つき」に、欲望という、人間精神の死にいたる深い病への洞察をみて、「われわれが座禅をするのは、ひたすら、それを捨てるためだ」と言われる。（確かに美貌のゴネリルの「陰しく」「燃える眼」が何よりそれを雄弁に語っている (2.4.167)。リアもまた、娘たちの愛情テストによる領土分割と譲渡における策略 “cleverness” という名の欲望の病に深く侵され

ていて、一切を失い一介のフールとなって、自他を不幸に巻き込んだその病气から解放される過程が劇の中核をなす、とされる。

彼が、嵐に向かって叫ぶ、「お前ら大自然に向かって、情けを知らぬなどと、責めはしない、／お前たちに王国を与えはしなかった。わが娘と呼びはしなかった。／わしに従うべき謂れはない」(3.2.16—18) という台詞を、娘たちにも、「自然」に対するのと同じく、自己本位の要求を押し付けるべきでなかった、と悟り始めているのだと先生は解する。しかし、字義どおりに読めば、この時点のリアは、荒野の嵐という「自然」に、人間の心を押し付けて(自分を苛むサド的快感“horrible pleasure”を「自然」に読み込む(3.2.18))、それと娘たちの心を同一視するという、“justice”(正義、裁き、応報)への妄執からくるアブサードな思い込みを犯し、両者に対して猛然と抗議をしているとも解される。リアが容易に「自然」を他者として受け入れる悟りの境地に達するとは思えない。後に、真の狂気に突入したリアが、リーガンの解剖を幻想して、「こういう冷酷な心臓をつくる原因が、自然そのものの中にあるのか？」と叫んでいることがその証拠である(3.6.76—77)。またそうした強情さがなければ、コーデリアとの再会がもたらす逆転もないのではないか。先生の禪的リア王は爽快で素晴らしいが、リアが、最後の最後になって、死んだコーデリアを抱いて“Never, never——”と何度も繰り返し咆哮し、あくまでも断念を拒否する、生への執念ぶりと、その超人的エネルギーには、驚くべきものがある。

『オセローの悲劇』のイヤゴーに、われわれが抱くある種の称賛の念を説明しようとしてブラッドレーが、“There is some soul of goodness in things evil”「悪の事物にも何らかの善の魂が潜んでいるものだ」(『ヘンリー5世』(4.1.5))を参照して、善悪が混在する中に善もあるという意味でイヤゴーにも良さがあるとするコメントを、回りくどいと一蹴し、良し悪しの相対的価値判断を棚上げせよ、すると、イヤゴーの悪そのものが、生き生きとした活動性とその一貫性において、そのまま善なのだという。ディケンズの、ひと癖もふた癖もある誇り高い犯罪者への先生の賛美に窺われる価値基準、悪事も“gusto”を持って、すなわち、まっしぐらに喜びをもって行えば善である、ということか?“Don't wobble”「もたもたするな」「没入せよ」と説く禅には、市民的常識を平然と覆す猛烈なところがある。勿論、悪は、その本質上結局は自滅するのだが。

シェイクスピアが、自分の魂に、この世を捨て、「永遠の命」に生きよ、と語りかける、ソネット146(同性間の、そして男女の、愛を歌うのが主流をなす本詩集の中で、例外的に宗教の匂いがある)を彼の最も深い思索の詩と先生は呼び、最後の2行を挙げられる。

“So shalt thou feed on Death, that feed on men,／And Death once dead, there's no more dying then.” 「こうして人を食らう死神をお前が食らうのだ。／そして死神が死ん

でしまえば、もう、死ぬことはない。これは、普通、「コリント前書」15の26、「死からのキリストの復活によって、自分の魂も死から蘇る、つまり死を征服する」を踏まえている、と解されるのだが (Colin Burrow, *The Complete Sonnets* 2002)、先生は、“dying to oneself once for all”「自我の最終的、決定的な死」は、無時間で無私の存在に入ることである、と解される。自己滅却から悟りへ、という禅的解釈は、異論があろうが、キリスト教に縛られない自由な読みは、異教の読者にも広くシェイクスピアを開放するもので、オープンで、本質的には、抹香くさいところのないシェイクスピアに相応しい。

シェイクスピアの禅的解釈のまとめとして、最後に『マクベス』をあげ、愛妻も愛息も、一網打尽、マクベスが放った刺客に惨殺されたという報告を受けたマクダフが呻いて言う「天は、ただ黙って見ているだけで、／あの者たちの味方をしなかったのか？」に対する答えは？と先生は問い、一呼吸おいて、それは、四悲劇のなかにあり、「イエス」ではない、また「ノー」ではない、と結論される（「見たり読んだりしている間、そして、ほとぼりが冷めないうちは」という限定つきだが）。450 ページに及ぶ大著を繰り返し読みながら、「ノー」、天は味方をしなかったとしか思えない。観客も、マクダフと一緒に、「神も仏もあるものか」と、感じているに違いない、という常識を捨てることができないのである。「今だ」「ここだ」という先生の禅の道は、限りなく近い筈だが、凡俗にとって、実は陰しく遠いというほかはない。

「それはそれとして」（先生の師、大拙の禅哲学が込められた信条）、あらためて思う。先生の「シェイクスピア」に今更ながら目を洗われ、もう一度シェイクスピアを読み直すという気になる。先生は、芭蕉を理解するには伝記が少しはいるが（「貧しさ」という観点から）、シェイクスピアには伝記は不要だといわれた。これは伝記に狂奔する現代の傾向（たちどころに、「ジェントル」でないシェイクスピアを掘り起こしたダンカン・ジョーンズ、「隠れカトリック・シェイクスピア」を暴くりチャード・ウイルソン、出世街道まっしぐらのシェイクスピアを描くグリーンブラット、生活と作品を等分に見比べるロイス・ポッター、等々が浮かぶ）に真っ向から対立する見解である。それらの伝記を興味深く読みながら、チェーンバーズや、シェーンボーム流の史実の研究は不可欠と見ながら、基本的には、伝記に懐疑的な自分を見出すのは、先生の影響だろうか。

シェイクスピアに、「不死鳥と山鳩」という、愛についての深く瞑想的、神秘的な小詩があるが、それについて、ポッターは、これでシェイクスピアはいくら稼いだなどと、懐勘定をやっている。憶測でしかなく、しかも純粋な鑑賞の妨げになるだけだ。生活から簡単に割り出せるようなら、シェイクスピアも、そもそも、詩も要らない。

今は、ブライズ先生の教えに従って、汗牛充棟のシェイクスピア学を、いや、ドラマの

筋、人物さえ忘れて、一冊本シェイクスピア全集を、どこでもいいパツと広げて、そこにある詩行を、虚心に読んでみよう。そこに確かにシェイクスピアがいる。(それとも、「プア・ロー」＜貧民救済法＞との関係を問題にすべきか?)。

When icicles hang in the wall,
 And Dick the shepherd blows his nail,
 And Tom bears logs into the hall,
 And milk comes frozen home in pail;
 When blood is nipped, and ways be foul,
 Then nightly sings the staring owl
 Tuwhoo!
 Tuwhit!, Tuwhoo! A merry note!
 While greasy Joan keel the pot.

When all around the wind doth blow
 And coughing drowns the parson's saw,
 And birds sit brooding in the snow,
 And Marian's nose looks red and raw;
 When roasted crabs hiss in the bowl!—
 Then nightly sings the staring owl
 Tuwhoo!
 Towhit! Tuwhoo! A merry note!
 While greasy Joan doth keel the pot.